

めだかの学校だより

特別教室

事務局：引佐郡引佐町
東久留女木 472-111
TEL 053-545-0381

私の玄孫は水上生活者？

特別教室校長

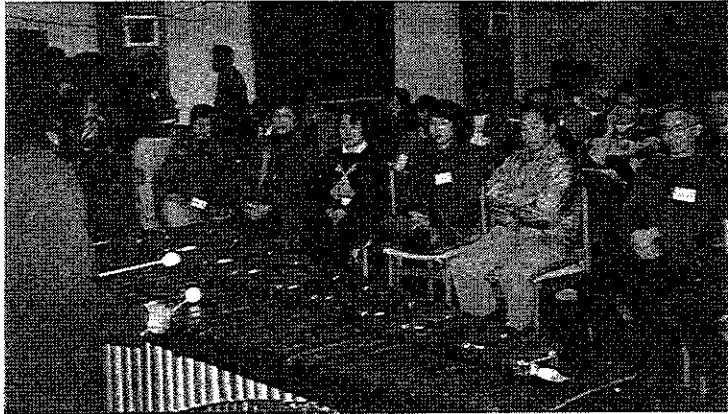
服部 守孝

私が住んでいる弁天島は開湖(津波に因って外洋と繋がって)から502年を向かえた浜名湖に浮かぶ10個の島からできております。島のほとんどが昭和初期に埋め立ててきた人工島で家の前の道路高は標高14mと極めて低い土地です。昭和29年の13号台風では満潮時と重なり床上浸水になりましたし、昭和34年の伊勢湾台風時も同様で床上浸水しました。

温暖化の調査を進める国際組織「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)の報告によると2100年には15cmから95cmで海面水位が上昇すると予測しています。(気温1度上昇で海面15cm上昇、2度上昇で50cm、3.5度上昇で95cm)このほか、水資源への影響、自然生態系影響、沿岸域への影響、農業への影響、人の健康への影響、公害への複合影響などが考えられております。

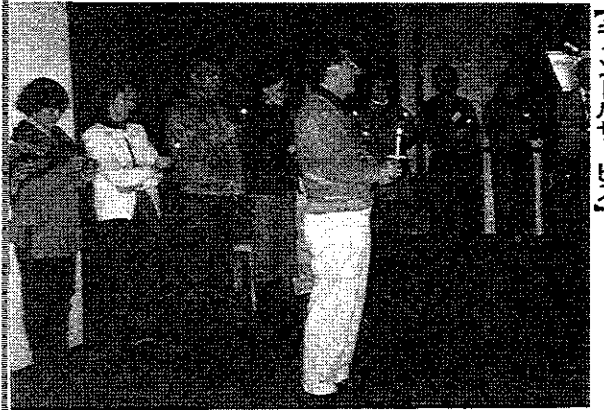
先進各国は1997年京都で行われた地球温暖化防止京都会議では、先進国全体として2008年から2012年までにCO2などの温室効果ガスの排出量を、1990年比で少なくとも5%削減する目標を決めました。日本は6%の削減です。温暖化の抑止はできて、も防止は極めて難しいと思います。しかし、私の土地が海面下にならないよう「無駄のない生活」をしたい。
このような現象に思いを巡らしたとき、私たちは21

世紀に何を残し、伝えていくことができるのか、2月12日、13日の特別教室では、52名の生徒が出席し時の経つのも忘れ、自らの思いを大いに述べあいました。



【マリンバコンサート】

めだかの学校特別教室 「私たちは21世紀に何を残すか?!」
 <日時> 1999年2月12日(金)PM6:20~13日(土)AM11:00
 <場所> 引佐町東久留女木字観音山
 「静岡県立観音山少年自然の家」 ☎053-545-0111
 <時間割>
 2月12日(金)
 PM6:20 開校・めだかの学校校歌斉唱
 星空マリンバコンサート演奏/藤城佐知子
 6:40 極寒の星空観察指導/少年の家職員
 7:10 キャンドルセレモニー
 進行/用務員・加茂光廣
 訓話/校長・服部守孝
 ローソクの灯を灯しながら、生徒“一人一言”をのべる。
 「あなたは21世紀に何を残しますか。持っていけますか？」
 PM7:40 特別講演「人類の遺産」講師/小嶋良之
 8:10 給食・5班に分かれて討論
 座長・副座長を囲みながら、飲み食い活弁〜大いに21世紀への思いをぶつけあう。大風呂敷を広げるのも大いに結構!ちよっと結び方も話して!
 <座長副座長>加藤修一・石野省三・溝口久・松田不秋・上嶋裕志
 金子芳美・鈴木真弓・渡辺三ツ子・天野恵美子・関京子
 11:00 240秒の発表ー結論は求めないけど結論をー
 ~60秒で次班とのひきつぎ~
 11:30~ 夜なべ談義へ。自由討論。
 2月13日(土)
 AM7:00 起床
 7:15 朝食・むすびとみそ汁
 8:00 観音山へハイキング~自由散策
 11:00 解散



【キャンドルサービス】



【星空観察】

【めだかの学校特別教室に参加して】

★めだかの学校特別教室に参加しました

(岐阜県福岡町・早川裕康生徒)

今回は都合で参加を見合わせようと考えていた特別教室にナンタカ参加する事が出来ました。藤城さんのマリンバ演奏に酔いしれ、夜空の星を仰ぎ、小嶋さんの神の遺跡の話を楽しみしい時を過ぎて頂きました。テーマ「21世紀に何を残せるのか？」は普段のめだかには無い試み。テーマがある座談会・交流会も新鮮に感じられ、気が付くと時計は11時を回ろうとしている。皆さんが何を残したいと考えているかとても興味がありまよめ発表会に聞き入る。「自然をいい形で残したい。」「農業をなんとかしたい。」「頑固おやじの権威をのこしたい。」「めだかの住める川を残したい。」「いろんな思いが花を咲かせました。」

泊まりを決め込み、翌朝は少年自然の家の裏の観音山へハイキング。夜更かしをして眠たい目をこすりながらの参加となる。草笛の加茂さんと一緒に頂いて頂いたため草木の解説を歩きながら頂く事が出来ました。

山の八号目付近まで来て、あらまビックリ！早太郎伝説のほこらがある。なぜビックリかと言うと、めだかに参加するついでに長野県の依頼で上伊那郡の宮田村で郡の地域づくりの会議に夢倶楽部から私が参加したおりに、翌日に職員の方が光善寺へ案内してください、そこで聞いた伝説の場所が目の前にあつたからです。

今よりおよそ680年前、光善寺に早太郎という大変強い山犬が飼われて居た。その頃遠州の見付天神社で、毎年祭の夜に二人の子女を神前に人身御供として供える悲しい習わしがあり、それを救おうとした一人の僧侶が怪物が信州の早太郎を恐れている事を知り、光善寺をたずね、早太郎を借り、子女の身代わりとなった早太郎の力で怪物(老ヒビ)は退治され、むらの災害は除かれた。という物語でした。

私は一週間の間に、光善寺と早太郎が怪物と戦った場所へ行ったというわけです。ちなみに私の名前は早川で生まれは

大年生まれと言うおまけつき。裏山からの帰り道で行方不明者が続出(下山道を間違えて別の場所へ降りてしまった)の中で、無事に生還できたのも(ちよと)大袈裟、長野で早太郎のお墓にちゃんとお参りをしたのと、一緒に頂いた加茂さんの御陰かな？。

(注)引佐町では、早太郎のことを「しっぺい太郎」と言っています。怪物も老ヒビではなくて大蛇で、光善寺よりしっぺい太郎を借りて、この地(観音山)に来ると、しっぺい太郎が急に吠え出し、恐怖に感じた坊さまは、短刀でしっぺい太郎の首を刎ねてしまった。首は宙を飛んで坊さまを狙っていた大蛇の喉元にがぶりとかみついた。それを知った坊さまは、この地に堂を建てて懇ろにとむらつたとのことです。

(榊原)

★めだかの学校、初参加の記

(新入生・横田浩臣生徒)

多士済々！変人の集合体！

めだかの学校の初印象である。

私たち、愛知県豊田市と長久手町から参加している三人、堀田望、堀田正子)も、「変人会」なるものを重ねて10年以上になる。不定期に数人が集まって開催していたこの会を昨年、発展的に解消して「小麦生(こむぎお塾)」とした。塾の冠に「農・自然・人生を考える」を載せた。めだかの学校と同様、年4回それぞれの季節の真ん中で会を開いている。毎回30人前後が集まってくる。今のところ塾が中心となり、それぞれの個人の能力が十分に発揮されているとはいいがたい。

「変人の集合体」それは時代を先取りしている集団と見た。常識人の枠からはみ出して考え、個人的には何の利益にもならないことに楽しみを見つけているだけである。人生を楽しむ達人でありたい。私たち以外の人からすれば「笑に付すであろうことを、徹夜で議論する集団に過ぎないのかもしれない。」

やはり、変人か。だが、それでいいと思っている。

さて、めだかの学校はまじめと遊びが両立している学校。現在の文部省が管轄する小、中、高校はこの考えを導入すれば、10万人を越すといわれている不登校生が減少することは間違いないであろう。

「小麦生塾」は、その中間あたりに生息している。まじめ人間が破壊人間になれないで、もがいている。めだかの学校から「あそび」を学んだ。次回からは、破壊人間になるように挑戦しよう。

「21世紀に残したいもの」のグループ討論の結論はいろいろであった。小嶋良之さんによる特別講演「人類の遺産」を全員が聞いた後の結果である。同じめだかの学校の生徒が5つのグループに分かれると、5つの結論が出てくる。多様な考え方が許される今日、自分の考えをどのように主張し、どのように生きていけばいいのかを考えさせられた夜であった。

★とんでもないメダカたち

(新入生・川島安一生徒)

小川の流れる近頃ではメッキ汚れて、メダカとて里には住めないらしい。こうしてメダカは、清流を求めて山に登る。底冷えのする2月12日の夜、観音山少年自然の家で開かれた「特別教室」に、新入りのメダカが匹迷い込んだ。

「君は21世紀に何を残すのか」とのテーマで開かれた教室では、既に流麗なマリンバの調べが雨上がりりの澄んだ山の空気を震わせ、メダカたちは音の方向に頭をそろえて並んでいた。やがて演奏は終わり、ギリシャ神話の影絵が始まる。星々の物語に時を忘れていくと、今度は澄み切った夜空の下に誘われ、いつの間にか冬の星座教室となった。十分に体が冷えきったところで、それぞれ口ソクに火をともし、歌声と共にキャンドルサービスとなる。厳肅な雰囲気の中で自分を考える。一転明るくなると今度は、小嶋良之さんの「世界の遺跡・聖地紀行」をテーマにした、壮大な人生ドラマについての講義である。息をつく暇もないプログラムの進行に、新入りメダカの小さな心はもう張り裂けそうである。

やっと給食時間になって、今度は空腹を満たしながらの楽

しい会話が始まる。教育問題の深刻さや地域づくりのこと、コシエニティーづくり、さらには前島康二さんの「パンズさん有り難う」の心には感動すらしてしまつた。

底冷えのする寒さで我に返ると、もう午前2時であった。翌朝、約15名が吹き溜まりに雪の残る山道を、寒風をついて観音山の山頂をめざした。2時間余の登山の後、頂上から眼下に遠州灘や浜名湖を遠望しつづつ、回し飲みさせていたいた特上のウイスキーの美味であつたこと、酒が利いたのか、下山ではちよつとしたハブニングがあつた。何時まで待つても帰つて来ない人がいたのだ。スワ遭難か？ほどなく別の地点に下山したとの電話。氷風の吹く中、山で道を間違えると大変なことになる。

ともかくも、新入りのメダカとしては、驚きと感動の二日であつた。今後ともよろしく願ひします。

【各班からの報告】

浜松では晴れていた天気が細江辺りから曇行きがややしくなり、引佐町に入つてからは雨に混じつて雪まで降り出す始末。

そう今日は満天の星空の下で、めだかの学校の生徒たちが「21世紀に向かつて何をすべきか」を語り合う特別教室が開かれる日である。この雪に明日は観音山から果たして下りてくることのできるだろうか、心配がつる。未来に向けて夢を語る日にしてはあんまりじゃないか、このところ殆ど雨さえ降らないのに雪なんて。いや待てよ、雪が閉塞感漂うこの世紀末を白紙に戻して未来を語り合つて欲しいとの恵みなのかもしれないと思いつつ、どこまで行つたら観音山が現れるのだろうかとうと車を走らせた。

相当なまで奥地、悪天候にかかわらず60人ほどの人が集まつた。星座を見るために外に出た頃には、雪もあがり2月の星座が頭上に現れていた。

その吸い込まれそうな星空の下で、皆の胸にはそれぞれ21世紀に向けての抱負なるものへ想いが膨らんだことと思われた。さて、いよいよグループ別に分かれての21世紀を前にやるべきこと、やりたいことと思ひの語り合いが始まつた。

☆溝口久班の報告

(溝口久生徒)

我グループでは「貴方の夢を話して欲しい」とスタート。次のような話が出た。

「いつまでも現役で人にアート、音楽を提供してゆきたい。」当日華麗なマリリンバの演奏で皆を魅了してくれた豊橋の藤城さんが語ってくれた。

いつもワイルドな浪合村の近藤さんは、彼らしく「生き物として自由になりたい。」自然と人間なんという対峙した関係ではなく、かつての人間生活がそうであつたように自然の一部としての暮らし方を模索し実践してゆきたいとの意志に思う。お次の豊岡村の鈴木さんは「生きた証を残したい。その二つとして、今つづじを茶園に植えて育てている。」美しいお花畑を次の世代に残そうとするものだ。同じく豊岡村の市川さんは「必要とされる人間になりたい。村においてかけがえない人間でありたく思う、それがその地に住む最も積極的な理由である。」

浜松市の山崎さんは「頑固親父でありつつけること」「ご自分の家庭での姿勢を披露しながら、あたりまえのことをあたりまえに実行して行くことこそ家庭が、地域が良くなることであると強く語られた。

藤枝の村松さん、今回初めてのめだかの学校。自らのことを自ら行うことをやるべく当たり前のことの大切さ、国にあつては食料の自給率のアップ、国防のあり方を国民に問いながら真剣に取り組むべきだと語られた。

細江町の山名さんは行政に携わる者らしく、「細江町の子供たちが笑顔で暮らせるような町にしていきたい。」住んで安心、細江町。

岐阜県福岡町の早川さんは夢倶楽部というグループでまちおこし活動中「町の真の交流人口を増やすために地域の人たちと共にいろいろ仕掛けてゆく」とのこと。これからの活動に注目したい。もちろん交流にも出掛けなくては。

もう一人の福岡町の西尾さんは「蕎麦屋をやりたい」とのこと、いずれも地域で楽しみ、また交流の装置としての様々な仕掛けを考えているようである。

富士川町の天野さんは「生きていく内は現役で、夢を織り続ける。」とのこと。ちなみに彼女の仕事場の名は夢織工房である。

最後は、当日の座長の私溝口、酔いどれで語る。「人を迎える空間をその地域との関係の中でつくりたい。そこで、内外の人と入り混じりながら農業と生き様を考えたい。できれば湯布院で。」と戻つて1年が経とうとして居るのに湯布院かぶれが治つていない様子である。

以上

2100年には日本の人口が6700万人と予想され、否がおうにも拡大社会を卒業しなければならなくなる。

新しいことが必ず良くて、今のままでいることを停滞していると考えるせつかな価値観を捨てて、少し前の伝統的な農村にあつた継続と循環の安定した無事な社会になって欲しいものである。そのことを自ら実験してみたたくて夢を語つたつもりである。

☆いじやん！たまには場所を変えて

「めだかの学校」

(上嶋裕志生徒)

よりによつて、今年一番の寒い中、観音山での「めだかの特別教室」だなんて、行つてみると、いじやん！いつもと違う雰囲気、学校らしさが伝わつて居る。各テーブルに集まり分科会で図らずも座長になつてしまつて居た。

このテーブルは、伊藤茂雄さんをはじめ、めだかの学校の御所ばかり集まつた。テーマは「20世紀に残す物」自然と親子の関係、食文化等、色々話が出て盛り上がった。

中でも加茂さんのバリ島での草笛で奏でる恋のお話や松本さんのソバの食文化のお話、伊藤さんからはこの観音山が県から町に戻つてくる可能性がある、その時地域住民はなにができるかこの自然をどのように活用して何を次の世代に残せるか提案があつた。

結局今の大人達が次世代の子どもたちに、親として、地域として、その役割と大切さを残していくことではないかと、こんな話だつたと思ひます。

☆愛はパンツを救う!? 加藤修一班の報告

(加藤修一生徒)

浜松農林事務所の川島安一さん「モノ、カネに追われている人生は所詮、おしゃか様の手のひらで遊んでいるようなもの。心やコミュニティといった生きることの原点が見えてくるような社会を」。バラ栽培の匂坂玲子さん「家の前の数百坪の土地が借りられるようになった。さあ、これからバラ栽培に本格的に取り組もう。でも小学校の参観会へ行つてなんかへんな差別のある教育を感じた」。浜岡町役場の中島豊さん「21世紀に何を残したら・・・こう考える仲間を増やしたい」。越後屋酒店の金子芳美さん「水俣展を見れば人間とは何か、近代とは何だったかがわかる。豊橋で開いたからぜひ浜松でも」。21世紀は時間こそ財産ということが痛切に解る。写真家の中山斗倭子さん(特別教室のみ)「小学校以来、もう一度ここへ来たいと思つていたことが実現した。水俣展を通じて自然への問いかけをしたい」。名古屋で唄芝居している山根圭二さん「心の健康は信仰のようにバックボーンがあればいい」。森町の天野さん「抹茶、煎茶、舞楽など、ライフワークを通じて、生とは、死とは、禅とは追究していきたい」。前嶋康一、恭代さんご夫妻(夫)「待望の子供が生まれた。中学校に7年間勤めて、地域も学校も、子供に手をかけていない事を知った。生の素晴らしさをもっと認識させたい」。(妻)「私は運がいいぞって一日百回唱えたり、主人のパンツにアイロンをかけている毎日が幸せ。モノ言えない赤ちゃんに対し、自分がまず健康な心と体を持たなくては」と、21世紀へ残したいものや、こうあつて欲しいことを話してもらいましたが講演してくれた小島さんの「20世紀は物理的な時代とすれば、21世紀は命の大切さや、幸せの原点を考え直す時代。何を残すかは各個で違うけど結局は、生あるうちは命(心)を生かしていきことが大事」という議論が出て、主人のパンツにアイロンをかける幸せが、21世紀への愛の一例としてクローズアップされました。

☆21世紀に何を残すか 松田不秋班

(松田不秋生徒)

次世紀は次世代、遠くを見るまでもなくすぐ傍らに共存している者に、自らが愛し守つて来た地域を安心して託せたら。と思えばこそ、地域が語る里山風景、伝統や文化も、何とかが守らなければという思い入れに熱がこもる。行く手に待ち受ける新しいライフスタイルへの模索に向けて、省エネによる生活維持の在り方への追及、1ターインを機に自然林の改植で旺盛な自生活力を見て知った田舎暮らしへの魅力、第二東名騒ぎに捲き込まれ、自然色豊かな村里風景を残したい思いを深め、農薬排除の作物栽培への意欲を新たに、更には里山づくりに労力不足を補う手として動物との共生をテーマにと、探求・実践発表は人様々。とどのつまりは、病んでいない自然を次世紀に送り届けることこそがというところに意見の一致をみた。

そこで、林野荒廃に端を発する循環の乱れが「病み」の原因と捉えるなら、林野経営の健全を阻害する人手不足、所有権の村外流出、誤った自然保護観、それもこれも人間が元凶とは考えられないか。特にこれから育つ世代に、自然の微妙な循環摂理への知識も関心も薄らいで行くのを問題視するなら、どうも今の教育に問題がありそうだ。しかしその責任は教師だけではない。飢えと物資不足の世を自然との共生の中で生きてきた貴重な体験を持つ者全てが負うべきだ。畜産経営の傍ら、農・自然・人生をテーマに子供相手の私塾を開いたり、住職である一教師が寺に子供達を集めて地域の文化掘り起こしに従事した啓蒙活動の手応えは十分。そのためには敏感に反応する好奇心の持ちこたえは勿論、俺達の領域を若者に荒らされて壊れるかと、開き直る頑固さを保つ気構えもまた必要。節目の時代を足場に結論とは言えないまでも、贈り主だからこそ教えられる自然の循環原理を、とくと次世代に伝え残す努力を惜しむべきでないという意見が共感を集めたのが印象的だった。

☆21世紀に何が残せるのだろうか

(第二グループ文責座長・石野 省三生徒)

次々に作り出されては消えていく数多くの流行 それをトレンドと称してまた追いかけていく人々がいるわけです。泡のように消えていくことが運命づけられた流行の向こう側にはいつも変わらぬ不易の顔が見えてきますよね。21世紀に何がのこせるのだろうかを語るとき、その底に意味するものが何かが今、問われる時代になってきたようですね。

我々のグループの話し合いの結果で、その底に意味するものを考えていく必要性を感じてきましたよ。それは我々が生きてきた原風景そのものの中にあるような気がするんですよ。

私たちは年齢に合わせそれぞれの自然体験・社会体験を得て、原風景そのものを心の中に焼き付けてきています。今それを語り21世紀へとつないでいこうとする意気込みと可能性がみんなにあるということを感じました。人間は、ある段階までくるとどこかで原風景に立ち戻りたいという気持ちが起こってくる。その原風景の中に何か現在のそして未来のあるものの萌芽というか、種子みたいなものがあるはずだと・・・そこにあらゆるもの出発点というのがあるはずだということですね。従来の伝統や習慣の根拠をなにも問うことをしないでただ引きずるのではなくて。町おこしとか、夢の実現とか、こだわりとかは常に変わらないものを発見したいという欲求が根底にあるということが少しわかったような気がするんですよ。

鈴木真弓さん、鈴木武史さん、池谷裕さん、揚張さん、牧野久子さん、山下愛子さん、鈴木計芳さん、天野恵美子さん、榊原幸雄さんと私10人の皆さん感想だけではありません。皆さんの息遣い、人間性、そして感性の豊かさに嬉しさを感じました。話し合ったことが受け継がれていくことに努力しましょう。